

に、血小板数の回復、出血傾向の改善がみられたと報告しており (Lechin F, et al. 2004)、本症例においても、SRIによる血小板セロトニン量の低値が、血小板数の回復を阻害した可能性が考えられた。

【結語】我々は、重篤なITPの症例において、SSRI中止後に血小板数の回復を認めたことを報告した。本症例では、何らかの原因でITPが発症し、治療抵抗性となり、原因してSSRI内服が関連していたと考えられる。SSRIが血小板や出血傾向に影響を与える可能性を考慮し、日常臨床を行う必要がある。

4 認知機能低下および脳局所血流低下を認めた身体表現性障害の1例

常山 暢人・鈴木雄太郎・信田 慶太
折目 直樹・染矢 俊幸

新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野

【はじめに】高齢者の身体表現性障害に認知障害が関与するとの報告は多いが、若年者の身体表現性障害における認知機能はほとんど検討されていない。今回我々は、思考力や記憶力の低下が先行し、その後多彩な身体愁訴が出現し身体表現性障害と診断され、入院精査により認知機能低下および脳SPECTにおける局所脳血流低下が明らかとなった若年女性の1例を経験したので報告する。

症例は21歳、女性。成長発達に問題なく、小中学校では中の上の成績で、対人関係は良好だった。高校在学中のX-4年頃より誘因なく記憶力低下、思考力低下が出現し、退学した。以後、単純なアルバイトをしていたが、X-1年10月頃より頭痛、肩こりが出現し、次第に腹痛、手足のしびれ、めまい、立ちくらみ、喉の痛みなども伴うようになった。思考力低下は次第に強まり、意欲も低下し友人との交流は希薄となり、X年3月にアルバイトも辞めた。身体症状精査のために複数の医療機関(内科、婦人科等)を受診したが器質

的要因は否定された。X年6月に当科を初診し、鑑別不能型身体表現性障害と診断された。その後、SPECTによる局所脳血流測定では右扁桃体、右視床、脳幹、両側海馬～海馬傍回、紡錘状回の血流低下を認めた。また、JARTでの予測FIQは88である一方、WAIS-IIIでのFIQは69であり、後天的な認知機能低下があると判断し、特定不能の認知障害の診断を付記した。

【まとめ】本症例は、認知機能低下が先行し、その後身体表現性障害と診断された21歳女性の症例である。入院精査により認知機能低下および局所脳血流低下を認めた。うつ病や統合失調症は否定的であり、若年者における進行性の認知機能障害を説明しうる疾患として、単純型統合失調症の可能性が考えられ、今後の認知機能障害の進行の有無について経過観察が必要である。

【最後に】当施設では、若年者の単純型統合失調症が疑われる症例、統合失調症前駆期が疑われる症例を対象に、脳画像検査・神経心理学的検査による評価および薬物治療研究を行っております。診断に苦慮される症例がございましたら、当施設までご紹介下さいますようお願い申し上げます。

5 精神科病棟における急性期統合失調症患者に対する心理教育の効果の検討 第2報

—患者を中心とした多職種協働という視点から—

安部 弘子・鈴木雄太郎・國塚 拓郎
島田 勝次*・武藤 由香*・田辺 崇司*
田中 佑子**・植木 明**・染矢 俊幸

新潟大学医歯学総合病院精神科
同 看護部*
同 薬剤部**
同 栄養管理部***

【はじめに】統合失調症患者においては、服薬アドヒアランスを向上し服薬を継続することが症状の再発・再燃予防に重要であり、そのための治療的介入が求められている。服薬アドヒアラン

ス不良の要因としては、病識の乏しさ、薬剤効果の理解をはじめとする多くのものが報告されており、これらの改善に患者心理教育が有効といわれている。従来の心理教育プログラムは、複数回を1クールとした施行が多いが、実際急性期患者には介入可能な時期から退院までの時間が限られている。また、参加者に対して個別に介入点を検討した報告も少ない。当科では、事前に参加者に対して介入点を検討するために多職種によるスタッフミーティングを設け、短期間での心理教育を施行している。今回2010年の報告から対象者を追加し、その効果を検討した。

【方法と対象】2007年9月～2011年8月までの期間に当院心理教育プログラムに参加した患者53名を対象とし、プログラムの前後で「薬に対する構えの評価票(DAI-10)」,「病識評価尺度(SAI-J)」を施行した。

【結果】参加者全体では、介入の前後でDAI-10では有意傾向が見られ、SAI-Jでは有意差は見られなかった。入院回数を「2回目までの入院」群,「3回以上の入院」群としてそれぞれDAI-10, SAI-Jの得点を介入前後で比較したところ、2回目までの入院群においてDAI-10に有意差が見られた。SAI-Jでは、どちらの入院回数の群でも有意差は見られなかった。

【考察】本研究では、DAI-10においては短期の介入でありながら、入院回数の少ない参加者に対して服薬の認識を変えることに効果があった。その理由として、先行研究では報告の少ない事前のスタッフミーティングが挙げられる。評価することは難しいが、ミーティングで患者情報の共有や介入点の把握ができたことが参加者への関わりに影響した可能性が考えられる。また、入院回数が増えるほど副作用に悩まされる可能性が増える。副作用とDAI-30とは負の相関関係にあることから、入院回数が多い参加者では有意差が見られなかったと考えられる。SAI-Jに関しては、先行研究とSAI-J得点を比較すると、先行研究での介入後の得点、外来通院患者の得点と本研究の介入前後の得点とが近似していた。従って、本研究では外来通院患者と同程度の病識を有し

た患者を対象としていたといえ、今回の介入では有している病識以上の改善が難しかったと考えられる。

【まとめ】今回の検討の限界として、対照群を設定していないことや、治療の影響を除外できていないこと、治療意欲が比較的高い患者を対象としたこと、短期間での評価にとどまることが挙げられる。長期的な効果を評価することや、今回の効果の継続方法が今後の課題として挙げられる。

6 新潟大学医歯学総合病院における精神科退院支援の実際

猪股ちづる*・鈴木雄太郎・染矢 俊幸

新潟大学医歯学総合病院精神科
同 地域保健医療推進部
精神保健福祉士*

【はじめに】新潟大学医歯学病院は、病床数825床の急性期医療を担う特定機能病院である。その内、精神科病床は、64床。平均在院日数は、91.7日。病床稼働率は、96.6%（平成22年度）である。

退院支援担当者として、平成18年度から医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）1名が設置され、平成20年度から精神保健福祉士（以下、PSW）が設置された。

【退院支援の実績】今回の発表では、MSWのみが配置されていた平成18・19年度と、平成22年度にPSWが支援した精神科病棟での退院支援業務の変化を考察する。

1. 介入患者数

平成18・19年度の介入患者数は43名。平成22年度は98名。

PSW設置後から介入患者数は増加。平成18・19年度と平成22年度を比較した場合、約4倍に増えている。

2. 年齢

年代別の介入割合では、20～39歳の若年者への支援が増加。65歳以上の高齢者への支援は全体の1/4程度。

3. 病名